



## 同志社人物誌 (17)

# 横井時雄

辻橋三郎

横井時雄には伝記はもちろん、略伝すら正確なものはない。創業時代の同志社に貢献をし、さらに、第三代社長として同志社教育に渾身の努力を払った横井に対する、これ程の非礼はない。筆者は、この一文では、その伝記への手がかりのための、正確な略歴を作ること、第一の目的とした。彼の思想については、その全貌を明らかに

したものではないが、同志社大学人文科学研究所編『熊本バンド研究』所収の、拙稿「『奉教趣意書』の成立とその後」「横井時雄と『時代思潮』」を参照されたい。

### 『黒い眼と茶色の目』から

「従兄の又雄さんは三十下で最早牧師として目ざましい成功をして居た。又雄さんの阿母

は敬二が母の妹であつたが、(中略)敬二の眼から見る又雄さんの頭上には「過去」の輝きがあつた。郷里の洋学校で逸早く耶蘇教を信じ、劇しい郷党の迫害の中に火の様な信仰を輝かした青年殉道者の一人として、ロオマンチックな色彩に彩られた又雄さんの名が敬二の耳に初めて響いたのは、敬二がまだ八九歳の頃であつた。十一二歳の敬二は、帝国大学の前身開成学校から京都協志社英学校に転じ別格聖書級の二三を下らぬ秀才として校長飯島先生から殆んど下へは置かぬ待遇を受けて居た又雄さんを見た。それから唯七年、敬二の身長が一尺余伸びる間に、又雄さんは灘の波ひた々と寄する予州の浜辺に、数百の信者を作り大きな会堂を建て、其教会の評判は遠く海外に馳せ、亜米利加から祝意を表しわざわざ音の好い大きな鐘を贈つて来た程の成績を挙げたのである。」

この一節は、新島襄(黒い眼)と山本久栄(茶色の目)を中心とした、徳富蘆花の小説(大正3)の一節である。文中に見える協志社は、いうまでもなく同志社であり、飯島先生が新島先生、敬二が蘆花、そして、又雄さんは横井時雄その人である。

## 一族

これらの人びとは、姻籍関係にあった。その間柄を示す、それぞれの家の系図を示しておく。(六十八ページ参照)

## 略伝

横井時雄は、先妻を喪った父小楠と、後妻として迎えた蘇峯・蘆花兄弟の母の妹つせ子との間に、安政四年十月十七日、肥後国下益

城郡沼山津村(今の熊本市神津町)に生まれた。父小楠四十九歳の時の子であったために、その愛情はひとしおのものがあつた。明治二年一月五日、十三歳の時、父小楠は、京都で刺客に襲われて落命した。四年九月、同年に創立された藩立熊本洋学校に入学、米人教師、L・L・ゼーンスの薫陶を受けた。八年七月二十九日、幾度もふるいにかけられて残った十一名の第一期卒業生のうち、トップクラスの一人として、同校を卒えてゐる。在学中ゼーンスによつてキリスト教に導かれ、九年一月二十九日の花岡山盟約(署名は三十日)に参加した。母は、亡夫小楠に申訳ないこととして、離脱を迫り、肯じなければ自害すると

つめよつたが、時雄は頑として応じなかつた。やがて、同年四月上京して開成学校に入学、翌十年九月同志社に転じて、新島襄の教えを請うた。これより先、明治八年十月、彼は、亡父小楠の嗣子となつてゐた伊勢佐太郎(従兄左平太のこと、父小楠の兄時明の長男、渡米の際変名し、そのままとつてゐた)が病死したので、その養嗣となつて跡をつぎ、伊勢姓を名乗つてゐる。

明治十二年六月、同志社英学校本科を第一期生として卒業、今治教会に赴任、教勢の拡張にめざましい働きを示したことは、前記蘆花文の通りであつた。この間、同志社副社長山本覚馬の長女峯(新島襄夫人八重子の姪)と結婚した。十九年一月、伝道会社専任委員となり、同志社教授を兼ねることとなり、今治を去つた。京都在住中、妻を喪い、母つせ子の健康もすぐれなかつた。二十年八月、その治療にも便宜があるとして、海老名弾正のすすめによつて上京、海老名に代つて本郷金助町の講義所を教することとなつた。同年十一月、今治教会で洗礼を授けた(当時十四歳)柳瀬義富の五女、神戸女学院出身の豊と結婚した。二十二年四月、横井姓に復姓した。横

井は、講義所の現状に不満をもち、会堂建設のために、米国における募金を思いたち、組合教会の伝道会社に申し出たが、反対された。やむを得ず、二十二年三月、押川方義とともに私費をなげうつて渡米した。彼の米国に在る間、伝道会社は横井の留守家族に手当を支給しなかつたために、妻豊は家庭教師をして家計を維持した。横井の募金は、当初、困難を極めたが、熱誠こめた懇請と、誠実な人柄は、堪能な英語にたすけられて、米人の心を打ち、二十三年二月、一万余ドルの成果を得て帰国した。かくて、同年四月、本郷東竹町に教会用地を購入、十一月建築に着手、二十四年四月二十五日、献堂式が挙行された。當時、本郷教会は、経済力の乏しい学生会員が多かつたことから、横井は、半ば自給伝道のかたちで尽瘁した。このころの彼の説教のなかには、いつも「馬鹿になれ」という意味の言葉が挿入されてゐたことである。本郷教会在任中、小崎弘道が同志社社長として赴任したあと、『六合雜誌』一一三号(325・17)、『基督教新聞』三五五号(23・5・16)から、それぞれ、その編集、あるいは、発行を担当した。また、同教会在任中、内村鑑三

の、例のいわゆる不敬事件によって拡大された、「教育勅語」とキリスト教との問題、それに基く井上哲次郎の提起した『教育と宗教の衝突』（明治26）論争に、キリスト教擁護の論陣を張り、井上をして、事実の誤謬を認めさせた程、ねばり強く闘った。内村に対しては、私的にも、終始、厚い友情を示した。二十七年五月、渡米前、副牧師のかたちで横井をたすけていた村井知至が、アンドヴァー神学校を卒業して帰国したのと交代に、同五月、横井が渡米、エール大学で哲学、史学を専攻して、二十九年六月帰朝した。横井の神学は、すでに、『基督教新論』（明治24）の頃から、自由神学への傾斜のきざしが見えていたが、『我国の基督教諸問題』（明治27）に至ると、その傾向は、一層、深まってきた。さて、三十年六月二十五日、小崎弘道に代って、同志社社長兼校長に就任した。二十九年八月二十一日以来、アメリカン・ボードと絶縁していた当時の同志社は、まさに、大いなる危機のなかにあったのである。横井は、スタッフを一新して、三十一年一月、文部省に、同志社諸学校への徴兵猶予、及び、その他の諸特権賦与を願ひ出たが、にべもな

く拒絶された。彼は同年二月二十三日、東京における社員会において、社則を変更し、キリスト教主義教育という不動の原則を、可動的なものとしようとした。それは、キリスト教界、校友会同窓会の、一致した反撃にあった。遂に、三十一年十二月二十八日、全社員とともに辞表を提出し、同志社を去った。彼は、同志社在任中、常に口にした言葉は、「理想」の二字であったという。その後、暫く、野に在った彼は、三十四年四月八日、通信省官房長に就任、同六月六日、辞職した。その時、正五位に叙せられている。その後、大阪新報主筆となり、椽大の筆をふるい。翌三十五年に及んだ。同年、外務大臣囑託となり、インド視察に赴き、翌三十六年帰朝、同年三月、岡山県から立憲政友会員として、衆議院議員選挙に立候補、当選した。三十七年秋には、政友会総裁西園寺公望に随行して南清に漫遊、同年十二月から、東京日日新聞主幹となり、翌三十九年八月まで、その席にあった。その間、三十七年二月、姉崎正治（嘲風）とともに、雑誌『時代思潮』を創刊、三十九年四月、二十七号をもって廃刊した。四十年五月、全国教育大集会で、新島襄追頌演説を

行っている。四十一年五月、岡山県から、再度、衆議院議員に当選した。西園寺の信頼のいかに厚かったかということは、四十年六月十六日の、西園寺の文士招待の席上、彼が、そのすべてを幹旋したということでも、推測することができる。四十一年五月、蘇峯徳富猪一郎とともに、臨時国語仮名遣調査委員ともなった。ところが、四十二年第二次桂内閣の手で日糖事件が追求され、四月、横井も召喚され、同七月、重禁錮五カ月、追徴金を課すとの一審判決に、直ちに服罪した。その後、暫くは、翻訳、著述にしがたっていた。

大正五年十二月、戦雲漂う欧州視察に赴き、主として、ロンドンに滞在した。大正八年、第一次世界大戦の終結の平和講和会議に、西園寺公望らの全権大使に同行、その語学力と、友人関係とをもつて尽力寄与するところがあった。同八月帰国、平和会議における功績によって、勲三等旭日中綬賞を授与された。同月、外務大臣の委嘱によって、さらに、渡米する筈であったが、熊本に帰省中、脳溢血のため倒れ、半身不随となり、長男直興の家に同居することとなった。その後、長男の任地にしたがって転々としたが、昭和二年九月十三



日、療養に赴いていた大分県別府において永眠した。時に七十一歳であった。

### 信仰と思想

横井のキリスト教信仰は、神と人間との関係も無視されていないが、「宗教の実学」という、いわば、人間と人間との関係——倫理に重点がおかれ、歴史のなかに展開する面が重視されていたようである（『宗教の実学』『六合雜誌』一五一号、26・7・17）。それが、一見、キリスト教と儒教倫理との妥協と思われる見解を結果したのであるうと思われる。例えば、忠孝を説いて、儒教は、忠孝を倫理の根本とする忠孝起原説だが、キリスト教では、「神人合」の信仰をもってする人間革命の結果、必然的に忠孝という道徳も守られるとして、儒教側の攻撃をかわしたのであった。しかし、彼のキリスト教信仰における忠孝の位置は、あくまで結果説であって、前提としてのキリスト教信仰は、守り抜かれているのである。（『忠孝と基督教』『六合雜誌』一二五号、24・5・15）。後の新神学建設の主張も、「基督自身の基督教」といい、「倫理的理想」の「発揚実現」といい（『我

邦の基督教問題』明治27）、やはり、「宗教の実学」という彼の基本的志向から、展開発展したものであった。

政治家横井としての生活は、僅か六年足らずであった。しかし、その政治家としての抱負は、幸に、彼の主宰編集した『時代思潮』二七冊から、たどり求めることができる。同誌上に、縦横に論じられている、政治論、国家論、戦争論、植民地経営論、国民精神論など、いずれの問題においても、キリスト教思想を根底として、理想主義の原理にたった立論でないものはなかった。恐らく、「宗教の実学」という彼の基本的志向は、不動の枠組みとして、彼の思考過程を終生、制約し続けたのであらうと思われる。

### 人物

横井の人物については、生涯、彼と親交を保った内村鑑三が、彼の通信省官房長就任に際しての一文（『万朝報』明治34・4・10、内村鑑三著作集、第四巻）と横井の死を追悼した、綱島佳吉の言葉（『故横井時雄君追悼演説集』）とを掲げて、説明に換えよう。

「横井時雄君が通信省の官房長となりて余は

臍の緒切つて以来始めて此の愛すべくして且つ憎むべき明治政府に余の友人の一人を其の高等官の一人として有つに至れり。惟れ怪む横井時雄君の如き腹の白き人が明治政府の如き腹の黒き政府の官吏とならるゝ事を、然れども余は信ず、是れ横井君の心が黒くなりし故にあらずして、其余りに白きに過るに依り黒き政府が君を欺くに人道愛國を以てせし事と、故に余は信ず此政府にして改むれば止む、然れども若し改めざるに於ては（而して其の改むるの希望更にあるなし）吾人は再び吾人平民の仲間（に君を有つの喜びを有するに至らん事を。余は此政府を以て日本国を救ひ得べしと信ずる横井君の頑是なき心を愛す、余は宗教に失望して政治に入りし君の心を憐む、余は此事に就て深く君を咎めざるべし、それは宗教界今日の泥濁は政治界のそれに一步も譲らざればなり、故に若し世の変節を以て君を責むるが如き者あらば余は余の全力を注で君の為に弁ずべし、斯く云ふは勿論余の君の迹を逐はんと欲するが為にあらず、それは余に取りては朝報社の客となりて其機一基を領するは藩閥政府の大臣の椅子を悉く余のものとなすに勝ればなり、余は切に泥海に於ける

横井君の成功を祈る者なり」。(内村)

「私は横井君が、善良なる、勝れた人物であった故に、政治界に於て失敗されたのであると思ふのであります。横井君は、政界の濁流を泳ぐには、余りにも潔白でありました。政界の泥水の中には、海山千年の怪物が游泳しております。其の中に立て、其途にかけては全然無経験の素人である君が泳ぎ得ることは、全く望外の事であつて、君の失敗は、日本の現社会が、これをなさしめたのであると私は見るのであります。」(綱島)

### 明治人

明治人の一つの類型として、自らの中にある可能性を、ただ一つに限定することなく、できる限り、その多くを開花させようと試みた一群があつた。横井も、その一人であつたといえよう。すなわち、牧師、教師、ジャーナリスト、政治家という遍歴には、才能溢れた明治人の一類型をうかがい得るに充分である。未だ、ほとんど、手つかずに放置されている横井の全貌が、今後、心ある人びとによって、明らかにされていくことを祈つて、筆を擱こう。

(校友・高校教諭・国語)

(墓) 京都市左京区南禅寺天授庵。

### 参考文献

荒木精之著『熊本県人物誌』日本談義社。  
『本郷教会創立五十年』。  
『今治教会八十年記念誌』。

石川芳次郎『同志社五十年史』カニヤ書店。  
小沢三郎『内村鑑三不敬事件』新教出版社。  
同志社大学人文科学研究部編『熊本バンドの研究』。

